

さくらじまの 海

2013年 第17巻 第1号
62



ヒトデの絵本に夢中の赤ちゃん (いおっこひろばにて)

特集「親子で水の生きものが好きになるために～いおっこひろばでの新しい試み～」	2.3
いるかの時間「ピークとカール」	4
ここがみどころ「ニシキエビ・シマイセエビ」	5
錦江湾のなかまたち 61.「ニオガイ」	5
アクアラボ かつおはなぜ「カツオ」?	6
特別展示室	
「錦江湾の大発見～サツマハオリムシの生き方に迫る～」	6
鹿児島生まれの金魚 隼人錦の故郷をたずねて	7
いおワールド通信	8

親子で水の生きものが好きになるために ～いおっこひろばでの新しい試み～

3階のシアタールームが「いおっこひろば」としてリニューアルオープンして4年。サメのタッチプール会場や各種イベントなどを行う多目的広場として利用されていますが、普段は小さい子ども向けの遊具や絵本などが置かれ、親子でくつろげるスペースとして開放されています。今年度から、このひろばの更なる有効活用をめざし、新たな取り組みを始めましたので紹介します。

親子で水の生きものが好きになるために

0歳から小学校に上がる前の子どもたちが、実際に海や川で生きものと触れ合うのはなかなか難しいものです。多くの子どもたちにとって「水族館」は水の中の世界を初めて見る場所であり、そこにすむ生きものと初めて出会う場所かもしれません。



初めてサメと出会うドキドキ

また、この時期はどこへ行くにも大人と一緒にです。大人がナマコを気持ち悪いものとして扱えば、子供たちも「ナマコ=気持ち悪い」と思うかもしれません。子供たち自らが多くの自然に触れ、そして興味を持つようになってもらうためには、まず保護者にその楽しさを知ってもらう必要があります。

この初めての出会いの場である水族館で、親子でたくさんの発見を楽しみ、海や川にそして生きものに興味を持ってもらうために、この「いおっこひろば」という空間をもっと活用できないかと考えました。

【とりくみ その1】

親子でさまざまな発見ができる絵本やおもちゃ

子どもたちは遊びの中で多くのことを吸収し、たくさんの方に気づきます。それは時に、大人を驚かせるほど本質をとらえたものであったりします。そんな「気づき」の名人である子どもたちに、生きものたちを観る視点を遊びの中で気づいてもらい、本物を見たときにさらに驚きや喜びを感じてほしいと思い、絵本やおもちゃを工夫しました。

また水族館にやってくる子どもの中には大人顔負けの魚博士もいます。興味を持った年齢など関係のないことに毎回驚かされます。ですから、ふりがなをつけ、子供の発達段階や興味に合わせた要素を取り入れるなどの配慮をしながらも、子どもだからといって簡単なことだけでなく、あえて水族館ならではの専門的な情報も遊びの中に取り入れることにしました。たとえば「クラゲは花」という絵本は、とても複雑なクラゲの生



水族館で本物に出会えるような絵本を多くそろえています

活史がテーマです。一見難しそうな内容ですが、美しく描かれたクラゲたちを目でおっていきことで、その内容が子どもたちにはわりとすんなり入るようです。読んで聞かせる側の大人が「へー！そうだったの」と感心することも多いかもしれません。水にすむ生きものたちは、本当に多種多様な生き方をしています。絵本やおもちゃを通して親子でさまざまな生きものに出会い、そして驚いてほしいと思います。



ボランティアとおりがみや塗り絵、工作などを楽しむことができます



【とりくみ その2】 水族館ボランティアのサポート

4月からは、館内の案内や解説をしている水族館ボランティアの新たな活動場所として「いおっこひろば」を加えて、お客さまへの遊びのサポートを始めています。絵本の読み聞かせを行ったり、おもちゃでいっしょに遊んだり、折り紙や塗り絵、紙工作なども用意していま

す。ボランティアがいることで、より効果的に絵本やおもちゃを利用してもらえるようになりました。さらに、ボランティアは絵本やおもちゃの修繕も行っており、その現場では新しいおもちゃや遊びなどが次々と提案されています。何よりボランティア自身が、「いおっこひろば」でのお客さまとの出会いを楽しんでいます。



修繕をしたり、新しくおもちゃをつくることも

これからのいおっこひろば

今は、生きものが作り出した造形に触れて、その美しさ、不思議さに気付いてほしいとの思いから貝殻やウニの殻などを使ったおもちゃが作れないか試行錯誤を重ねています。また、さまざまな情報を閲覧できるようにし、それをもとに親子で海や川にでかけたり、水の生き



親子で楽しめるいおっこひろばに

ものを飼うことができると考えています。

まだ動き始めたばかりですが、「いおっこひろば」の抱える役割は大きいと自覚し、今後も取り組んでいきます。

(柏木由香利)



生きもののかたちパズルは大人気！パズルをしながら、丸や三角や星形など生きものは色々な形をしていることに気が付きます



ハゼとエビの共生パズル。さまざまなエビとハゼが共生していることを色合わせをしながら知ることができます



絵本を通して水の生きものを知り、その生き方にふれることができます

いるかの時間

ピークとカール

平成25年1月10日に2頭のハンドウイルカが新しく仲間入りしました。和歌山県太地町からトラックで約18時間かけて鹿児島へとやってきました。

かごしま水族館ではイルカの愛称を主に体の特徴からつけています。1頭は背びれの先端がとがっていることからピーク (peak)、もう1頭は背びれが後ろにまがっていることからカール (curl) と名づけました。



ピーク



カール

ピークは体重214kg、体長2m52cmで体の色は全体的に黒く、カールに比べるとトレーニングにも積極的で慣れるのが早いのですが、ちょっと気があらいところもあります。

一方、カールは体重231kg、体長2m68cmとピークより大きく、お腹の色は黄味がかった灰色で性格はかなり臆病です。



職員と遊ぶカール

さて、水族館へやってきたピークとカールはどのような毎日を送っているのでしょうか？ピークとカールは現在、イルカプールの裏にある予備プールで過ごしています。最初のうちはひたすら2頭で寄りそって泳いでいました。えさの時間には恐る恐るトレーナーのそばに近づいてきますが、水面から顔を出すことはできませんでした。しかし時間が経つにつれて、すっかり慣れて元気に水面から顔を出すようになりました。最近では職員に体を触らせて遊んだりするようになってきました。

そして現在ではいろいろなトレーニングを進めています。野生からやってきたピークとカールは丸ごとのサバを食べていますが、まずは「いるかの時間」などで使う、切り身の魚を食べるようになることが一つの目標です。試しに尾びれを切ったサバを与えてみると吐き出して捨ててしまいました。今度は尾びれの先端だけハサミで少し切って与えると食べてくれました。どうやら口の中に入ったえさを、一度舌で確認しているようです。切る範囲を少しずつ変えて試してみると、切ったサバに少しずつ慣れてきました。

さらに今後はトレーナーの手の合図でいろいろな動きができるようになること、水族館の他のイルカたちと仲良く過ごせるようになること、他のプールに移動できるようになることなど、皆さんの前にデビューするまでにやらなければならないことがたくさんあります。皆さん、ピークとカールに会える日を楽しみに待っていてください。(宮崎 亘)



トレーニングの様子



切り方を少しずつかえたえさのサバ



ニシキエビ・シマイセエビ



(左)ニシキエビ (右)シマイセエビ

ニシキエビとシマイセエビは、体長が40cmを超える大型のイセエビのなかまです。どちらも鹿児島県では南西諸島の海に多く生息し、地域によっては食用にされ、ニシキエビは家に飾る装飾品としても利用され



ニシキエビを押さえて、たわしでこする様子

ています。水槽ではその美しい体色に注目していただけるように明るい照明を取り付けています。しかし、長期間飼育していると強い光の影響で背中部分に藻類が生えてきてしまいます。観察していると脚の爪先や爪先に生えたブラシ状の毛で背中を掃除している姿も見られますが、脚がとどかない場所は飼育係が定期的にたわしでこすって掃除を行います。しかし、少しでも体に触れると第2触角(以下、触角)をムチのように手や腕にぶつけてきます。実はイセエビ科のなかまはカニのようなハサミ脚を持たないため、そのかわりにするどい棘の生えた硬く頑丈な触角で外敵を追い払います。掃除をするときには長い触角を折らないように手で押さえながら慎重にこすりますが、押さえが甘くなった隙について必死に抵抗してきます。掃除が終わる頃には毎回手や腕が傷だらけになってしまいます。美しい体色と大きな体、ひときわ目立つ立派な触角にもぜひ注目してみてください。(西 陽亮)



錦江湾のなかまたち

61.ニオガイ

大潮の干潮時は特に多くの生きものと出会えます。今回は干潮時の海岸で見られる隠れ上手な生きもののひとつを紹介しましょう。

錦江湾の湾奥、霧島市隼人町の小浜海岸(でいがん)の泥岩には一面に穴があいています。穴を掘ったのは二枚貝のニオガイ(鳩貝)です。

ニオガイの“ニオ(鳩)”とはカイツブリという水鳥の古い呼び名で、貝がらの形がその鳥の翼に似ているところから付いたといわれています。



ニオガイが泥岩にけた穴

巻貝には歯で物に穴を開ける種もいますが、二枚貝は歯を持っていません。ではニオガイはどの様にして岩に穴をあけているのでしょうか？実は、貝がらの表面で少しずつづつづつします。小さな突起のある貝がらごと回転して穴をあけているのです。回転するときには足が吸盤状に変化してくぼみに張り付いて回ります。こうしてできた穴はニオガイのサイズにぴったりで外から引き抜く事は出来ません。身を守るのに最適な住居となるのです。干潮時も穴の中には海水がたまっているので干上がることはなく、穴の中では海水中の有機物を濾して食べています。

今回紹介したニオガイの他にも海岸にはまだまだいろいろな生きものがあります。干潮時に海岸を探索すると楽しいですよ！(船川賢治)



かつおはなぜ「カツオ」?

水族館で面白い形や変わった模様の魚を見つけた時、「何という名前の魚なんだろう?」と、ついつい魚の名前を探してしまうことはありませんか。魚の名前の由来は、色や模様、姿形など見た目の特徴をとらえたものや言い伝えるうちに訛って現代に伝わったものなどさまざまです。

カツオは鹿児島県を代表する魚のひとつです。当館では黒潮大水槽で高速で泳ぐ様子をご覧いただけます。カツオを食べる歴史は古く、平安時代から食用とされてきましたが、当時は新鮮な刺身で食べることはなく、干し固めたかつお



ニザダイのなかま

「〜ハギ」は皮が硬いためはぎ取って調理していたことに由来します。

節のような状態にして利用していたようです。このことから「堅魚」と呼ばれ、やがてそれが訛って「カツオ」となり、魚偏に「堅い」という字を当てて漢字一文字で「鯷」と書くようになりました。「鰯」「鯖」など魚偏とその魚のイメージを表す漢字を組み合わせ、漢字一文字で表される魚は多く、それらの魚たちが古くから日本人に食用として利用され、なじみ深いものだったと考えられます。

「この魚は赤いからアカ〇〇かな?」など、みなさまがその魚の特徴から連想した名前は、もしかしたらその通りかもしれません。水族館でご覧いただく魚も魚名板を探す前にちょっと想像してみませんか。(土田洋之)

アクアラボメニュー

- (月) 今年もマンボウがやってきた! 大瀬
- (火) こんにちは イルカの赤ちゃん ~ラスキーの成長日記~ 築地新
- (水) 水の中の小さなごちそう ~プランクトンのはなし~ 中村
- (木) ナミノコガイでお手軽 潮干狩り 広瀬
- (金) すいそうの楽しみかた講座 丹羽
- (土) かつおはなぜ「カツオ」? 土田
- (日) 干潟のはなし 林

平成25年4月1日(月)~7月31日(水)

特別展示室

錦江湾の大発見

~サツマハオリムシの生き方に迫る~

平成25年7月13日(土)~9月23日(月)

この夏、鹿児島市では世界40か国から1000人もの専門家を迎えIAVCEI(国際火山学地球内部化学協会)学術総会が開催されます。また、来年は桜島が大隅半島と地続きになった大正大噴火から100年を迎え、これまでに火山への関心が高まっています。そこで当館では、海底火山を有する国立公園「錦江湾」と火山が育む不思議な生きもの「サツマハオリムシ」を集めた企画展を開

催し、サツマハオリムシのおもしろさや錦江湾の豊かさを広くみなさんに紹介することにしました。

今回の企画展はいつもの会場から大きく飛び出して、4階「かごしまの海」コーナーから始まります。常設展示を大きく見直して、キピナゴやマダイ、ノギリザメなど錦江湾の生きものの展示に特化し、サツマハオリムシを育む錦江湾の豊かな生態系を紹介しています。メイン会場となる3階の特別展示室では、ハオリムシとはどのような生きものなのか、最新の研究成果を交えながら詳しく解説する一方で、専門的になりがちなハオリムシの魅力を子どもたちにも伝えるため、隣の「いおっこひろば」にキッズコーナーを設けます。ハオリムシのぬいぐるみや採集体験ができるハンズオン展示など、楽しみながら不思議なハオリムシの世界を知ることができます。

他にも記念イベントの実施やオリジナルグッズの制作販売など、全館を挙げて「錦江湾の大発見~サツマハオリムシ」の生き方に迫ります。ぜひ水族館へ足を運んで、サツマハオリムシの魅力を感じてくださいね。

(出羽尚子)



サツマハオリムシ

鹿児島生まれの金魚 隼人錦の故郷をたずねて

平成25年4月27日から6月23日まで「アンコール企画 もう一度見たい特別企画展 初夏に華やぐ金魚の世界」を開催しました。これは昨年開館15周年を迎えた際にお客さまからアンケートをとり、過去に行った特別企画展の中からもう一度見てみたいテーマを選んでいただいた結果、「金魚」が見事一位に選ばれたためです。お祭りの金魚すくいのような小さな金魚を持ち帰ったり、ペットショップの水槽を泳ぐ金魚を買ったりして一度は飼育をしたことがある方も多いのではないでしょうか?また他の魚とは違い金魚は人の手によって作られた魚です。そのため、一口に金魚といっても色・模様・姿形の違うさまざまな品種が見られます。そのような理由からアンケートでも人気が高かったのかもしれませんが。

今回の展示でも18種類ほどの品種を紹介することができました。その中でも目玉のひとつとして「隼人錦」という金魚を紹介しました。これは鹿児島県で生み出された品種です。今回は隼人錦の生まれた養魚場を訪ねてきました。

鹿児島県南さつま市に隼人錦の生まれた巻木養魚場があります。山のふもとに位置し、緑に囲まれ、そばを流れる川の水が飼育水に使われるような自然の豊かな場所にあります。ビニールハウス、屋外のコンクリート池、春に仔稚魚を育てる池など、40ほどの池をオーナーの巻木健一さんと息子の瞳さんの二人で管理しています。



巻木養魚場の金魚たちは自然の中で育てられています



親子二人で管理しています



巻木養魚場生まれのジャンボ獅子頭 人間と比べるとその大きさが分かります



鹿児島生まれの隼人錦 キャリコ柄が見事な個体です 写真提供:巻木養魚

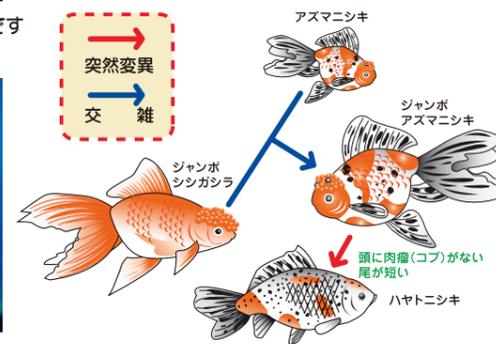


鹿児島生まれの隼人錦 写真提供:巻木養魚

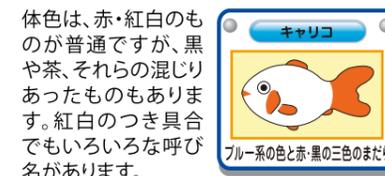
巻木さんはこの地で40年ほど前に錦鯉や琉金、オランダ獅子頭などを育て始めました。その後、熊本県の長洲町で見た黄色い大きなオランダ獅子頭に惹かれ、改良を重ね、成長すると40cmにもなるジャンボ獅子頭を作りだしました。またいろいろな色合い・模様のジャンボ獅子頭を楽しめればとの思いから、東錦と掛け合わせジャンボ東錦を作りました。その間、水害で金魚たちを流されたりと大変な苦労もあったそうです。

そして、平成20年にジャンボ東錦を元に尾が短く、肉瘤がなく、和金に比べやや体高体幅のあるキャリコ柄(透明鱗または、透明鱗に普通鱗がまじるモザイク透明鱗)の隼人錦が、21年に普通鱗の素赤や更紗の隼人錦が生まれました。これらは鹿児島で生まれたこと、また、動きが活発で丈夫なことから鹿児島の男性をさす「薩摩隼人」より隼人の文字をもらって名付けたとのこと。今では日本全国にファンがいる鹿児島を代表する金魚になっています。(山田守彦)

金魚の系統図



体色と模様



体色は、赤・紅白のものが普通ですが、黒や茶、それらの混じりあったものもあります。紅白のつき具合でもいろいろな呼び名があります。

こんなこと

あんなこと

いおワールド 通信

カタクチイワシの群れ

4月24日の早朝、黒潮大水槽に約3万尾のカタクチイワシがやってきました。このカタクチイワシの群れは、当館の目前に広がる錦江湾で行われているまき網漁で捕獲され、海上イクスで一度畜養したものを、大型輸送容器「ジンベエ丸」を用いて搬入されました。

ジンベエ丸から水槽の中に飛び出したカタクチイワシの群れは、銀色のうろこをキラキラと輝かせながら、さまざまな形をつくりだします。この行動は水槽内にいるカツオやクロマグロなどの大型の魚たちから食べられないようにするためのものです。小さなカタクチイワシが生きていくための躍動感あふれる動きをご覧ください。（大瀬智尋）



搬入直後のカタクチイワシ



ラッコのチェリー(メス)が5月23日に永眠しました

チェリーは平成10年10月3日にアメリカのアラスカからかごしま水族館へやってきました。チェリーはかごしま水族館で14年7か月を過ごし、年齢は推定で18歳を超えていました。

4月頃から体調をくずし治療をしていましたが、5月22日よりえさを食べなくなりました。それから回復することなく5月23日午前6時に死亡を確認しました。

多くの人たちに愛され、ラッコという動物の素晴らしさを教えてくれたチェリーに感謝すると共に、心から冥福を祈ります。

かわいい“きんぎょぼうし”ができました！



4月27日、特別企画展「初夏に華やぐ金魚の世界」のオープニングイベントとして「きんぎょぼうしをつくろう」を行いました。大きな紙を折り紙のように折ってぼうしを作るこのイベントに400人をこえる方が参加され、色とりどりのかわいい「きんぎょぼうし」ができました。

編集後記

まずは悲しいお知らせです。平成10年、アメリカ合衆国・アラスカ州からやってきたラッコのチェリー（♀）が5月23日に死亡しました。18歳以上という高齢ではありましたが、15年の間、あるときはラッキー（♂）と、またあるときはカイ（♂）と共に過ごしながら、ラッコという動物の魅力を存分に私たちに伝えてくれました。二世誕生の期待が叶わなかったことだけが惜しまれます。

次に嬉しいお知らせです。5月10日深夜にハンドウイルカのチークが出産しました。授乳も安定して行われ、母子ともにすこぶる順調です。この冊子が届くころ、皆様から応募のあった仔イルカの愛称が決まっているかもしれません。（荻野）

水族館ボランティア1年生



「かごしま水族館は楽しいなあ、わくわくする」・・・これがボランティア研修を受けた時に心の底から素直に感じた気持ちでした。3月の応用研修で7つのカリキュラムを一通り受講しました。その時、何度か冒頭の言葉が口から出そうになり、その度に思わず手で塞いだものでした。

職員やボランティアの先輩からボランティアとしての心がまえや生きものの知識を親切に優しく教えてもらい楽しく活動しています。これから来館者の皆さまに、「かごしま水族館に来て良かった」と喜んでいただけるような活動を心掛けたいと思っています。

（16期 三島輝史）

